

審 査 の 結 果 の 要 旨

氏 名 Lee Yoke Lai
リー ヨク ライ

「Study on the Evolution of a Heritage Tin Mining Town: A Case of Taiping in Perak, Malaysia、錫鉱山町の遺産としての展開に関する研究」は、マレーシアの錫産業を支えた鉱山町が、なぜそこに立地し、繁栄し、その後、鉱山は終わったあとにどうなっているのか、という実態を把握したうえで、遺産としての価値を明らかにしたものである。

第1章は、研究の背景、問題意識、研究の目的、意義、手法について述べる。

1820年代にイギリスがマレー半島を植民地にして錫産業をはじめる。本研究が主張なケース・スタディとしてあげるタイピン (Taiping 太平) は、その最も初期の鉱山町である。鉱山町は植民地でもあり、マレーシアにとっての近代化でもあった。

また、近年、産業遺産に対する評価が国際的に蓄積されるようになっている。

こうした状況において、マレーシアの錫鉱山町を産業遺産として理解する研究は重要である。

第2章では、産業遺産 industrial heritage、文化的景観 cultural landscape、植民地計画 colonial planning という三分野の既往研究をレビューし、錫鉱山町の保存計画に生かすための研究の枠組みを設定する。

マレーシアの文化的景観として認知されているものは、太古から続く水田の風景、東海岸の風景、混合農業の風景、イギリス植民時代の西海岸の風景、紅茶プランテーションと混合農業の風景、1957年独立以降のプランテーションの風景だけであり、錫鉱山町の産業遺産としての風景は広く認知されていない。

第3章 Perspective of Mining Town and Landscape in Malaysia では、マレーシア全体の錫鉱山町の立地の位置と時期、その後の衰退までを包括的に論述している。特に繁栄した Kinta Valley を中心に、都市形成と変容を形態と社会的な側面から示している。採掘場所から次第に鉱山町に空間が膨張するときの河川との関係、地形や気候の影響で作られたヒル・ステーションと鉱山町の空間的な広がり、高地に展開したイギリス人居住地、大きく発展した鉱山町と小規模なままの鉱山町の相互補完などが明らかになった。

第4章 Case Study on Taiping Tin Mining Town は、第3章の全体像をふまえたうえで、原型がよく残る小規模な鉱山町として位置づけられる。Larut District にある。古写真、古地図、データ、統計資料、現地踏査、インタビューなどにより、Taiping の鉱山町としての計画、その後の住みこなしや発展、閉山したあとの生活を、物理的な空間と、異民族の共生や人々の記憶などを含む社会的な面によって、明らかにしている。

街路網、市場、Padang (エスプラナード)、サーカス・グラウンド、Lake Garden、ヒル・ステーション、排水システム、洗濯サービスの場所 (The Dhoby line) などの要素に、錫鉱山町としての意義があること、またこれらの現状を明らかにした。現在、行政が進めている保全計画では残存が明確な建築物のみが保存対象となっている考え方に、新たな示唆を与えている。

第5章 Analysis, Finding and Discussions においては錫鉱山町の広域的な変遷を整理したうえで、変容と土地利用、地形と立地、水の供給と排水、多民族の集住における分離と混在 (clan association) という論点を提示し、都市形態の変容モデルとして整理した。

第6章 Conclusion and Suggestions では、以上の議論をまとめたうえで、保存計画の対象範囲を District のレベルでは拡張し、広域のレベルでは新たに設定すること、記憶調査も重要であることから市民認知を豊かなものにすることなどの示唆を得ている。

以上、マレーシアの錫鉱山町の全貌を整理したうえで、ケース・スタディの対象地 (Taiping) の産業遺産としての価値と文化的景観としての価値を明らかにした。得られた結論は、保存計画に関する新たで有益な知見となっている。マレーシアの保存計画分野においては、ほとんど解明されていなかった分野であり、錫産業が果たした影響の重大さを踏まえれば、非常に重要な知見といえる。

よって本論文は博士 (工学) の学位請求論文として合格と認められる。